

第十回記念 玄和全国競書大会優秀作品



北原加枝子

審査所感

作品制作をする上で全体構成が重要なのは言うまでもない。そしてそれを支えるものとして文字構成や布置章法があり、また線質や墨色といったものも当然重要な要素となる。それらの要素が巧みに調和され、さらにはそこに自己の表現しようとする制作意図が明確に織り込まれたものが魅力ある作品と言えよう。

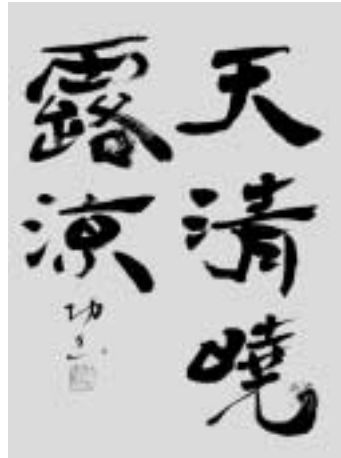
一般部入賞作品にはそうした要素が十分に見られたものが多く、感動すら覚えたが、反面その作品が果たしてどこまで独力で創られたものなのか甚だ疑問が残った。作品を見ると各社中色が一見して判別でき、そこには各社中の師匠の顔が見え隠れする。作品の多くは「春浦調」を基盤としているが、古典を基盤とした做書的作品がもう少し見られても良かったのではないかとも思う。

「春浦調」を追うのはある意味玄和書道会の使命であるかもしれないが、この先更にその作風を目指そうとするなら、春浦先生が辿ってきた古典をもう一度自分なりに見直し、「春浦調」が完成するまでの過程を研究し、新たな「春浦調」を

— 玄和書道会賞 —



加藤 美紀(高三)



鈴木 功



佐藤愛香音(小三)



平本真理子(小五)



バーナムシエラ(中三)

築いてくれる人が現れることを期待したい。
 上位入賞者の中には玄和誌や各方面の展覧会で活躍する人の名も多く見られたが、その人達には今後独自の作品を制作するという意欲と決意を持っていただきたいと思う。
 全国競書大会と銘打っても出品者の殆どが玄和関係者であるため作品の傾向は大凡予想がつく。その中で際立つ作品を見せるのは容易ではないが、古典を踏まえ独善的にならぬよう格調高い作品制作を目指して欲しいと思われる。
 さて学生部だがこちらも力作が多く見られた。特に中・高校生の作品には一般部顔負けの作品も見られ、とりわけ臨書作品にはこれが高校生の書いたものなのか、と思わせるものもあり、将来が非常に頼もしく、楽しみに感じられた。
 幼年部から小学生低学年部においては、やはり「らしさ」が大切だと感じられた。その年代に見合った書きぶり、子供らしさ、小学生らしさの表現が明暗を分けたように感じる。甚だ抽象的で申し訳ないが私の感じたところである。
 審査委員長 三浦 土岳

— 玄和書道会会長賞 —



村上 昭代



ケレハー謙汰(高一)



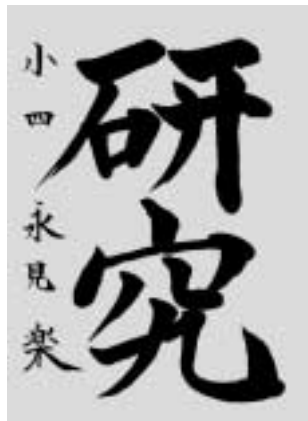
山口 歳子



飯田 静香



千葉 政宗(小一)



永見 楽(小四)



武井 俊樹(中二)